

石川舜台の影響力について

- 大谷派の朝鮮開教のあり方を一視座として -

天野勝重*
yiq00013@gmail.com

<目次>

- | | |
|-------------|---------------------|
| 1. はじめに | 3. 大谷派の朝鮮開教に至るまでの足跡 |
| 2. 石川舜台について | 4. おわりに |

主題語: 浄土真宗(JODO SHINSHU)、本願寺(HONGANJI)、大谷派(OTANI-HA)、石川舜台(ISHIKAWA-SHUNTAI)、海外布教(OVERSEAS MISSIONARY)、

1. はじめに

浄土真宗の宗派である東西両本願寺は日本仏教の中でも一二を争う門徒数を誇る巨大宗派である。両者は江戸時代初めに徳川家康の政策により二つに分けられ、そのまま現在までその形を維持している。

両派の対応で特に違いが見えるのが幕末の動乱期である。西本願寺派が薩摩・長州といった倒幕方に付いたのに対し、東本願寺(大谷派)は当初幕府方に付いた。歴史の結果は薩長を中心とした勢力が江戸幕府を倒し明治政府を成立させたことによって、宗教界の権力争いに大谷派は大きく出遅れることとなる。また明治政府が天皇制を基盤とした国家体制を採用したことによって、特に明治初期は廃仏毀釈を筆頭に、仏教が従来の権勢を保てなくなるのではないかという危惧もあった。そのため大谷派は、政府の要求を次々と呑むことで、何とか生き残りを図ることになる。政府への度重なる資金提供もその一つであ

* 嶺南大学校 文科大学 日語日文学科 副教授

1) 『宗教年鑑 平成27年度版』(文化庁編、2016年3月30日発行)では東本願寺が寺院数8,551、信徒数3,204,160に対して、西本願寺が寺院数10,206、信徒数7,926,894と記載されている。ちなみに平成17(2005)年度と比較してみると、東本願寺は信徒数が200万人程度減少しているのに対し、西本願寺は100万人程度増加しており、その結果10年前は信徒数の差は140万人程度だったのが、現在は470万人程度まで開いている。

り2)、また地方や海外への布教もその重要な要素であった。そしてその海外布教に大きな役割を果たしたのが石川舜台である。

現在では石川舜台という名はほぼ忘れ去れているが、実は明治初期から中期の大谷派の、ひいては現在に至るまでの方向性を決定した人物と考えられるのである。舜台の経歴などを確認しながら、大谷派の明治初期から中期の活動に舜台がどのように影響を与えていたかを見ていきたい。

2. 石川舜台について

まず、石川舜台について現在は何のような人物として記載されているのか、確認してみる。例えば吉川弘文館の「国史大辞典」には以下のように記述されている3)。

石川舜台(一八四二 - 一九三一)

明治時代の真宗大谷派の宗政家。字は敬輔、号は節堂・青城・竜演など。天保十三年(一八四二)十月金沢藩小立野土取場の真宗大谷派永順寺で誕生。父祐誓、母貞。青年期まで郷里で漢学・宗学を学び、二十一歳で東本願寺の高倉学寮に入った。明治二年(一八六九)金沢で慎憲塾を開いて青年を指導、『慎憲塾叢書』を刊行した。同四年本山寺務所開設で渥美契縁と最高職の議事に就き、翌年改正掛となり宗政革新をはかった。同五年新門(法主職継職者)大谷光瑩らと欧米を巡遊し、翌年七月帰朝。新知見に基づき宗政を改革し、高倉学寮に翻訳局、編集局において諸宗教典籍の翻訳、諸学概説の編集をさせ、教団の学制を全国の小教校・中教校と、京都の大教校に改め、全国に寺務出張所において教団機構を整え、薩摩・琉球などの国内布教を充実し、清国・朝鮮などに伝道機関を設けた。同二十五年富山県石動町(小矢部市)の同派道林寺住職を兼務。同三十年再び参務として宗政を担当、清国・台湾・朝鮮などの開教、政府提出の宗教法案反対運動、巢鴨監獄の同派教誨師解任事件の解決などに努めたが、積極策が買われず、また諸事業資金調達上の財政問題で不信をうけ、同三十五年四月辞任した。同三十七年三たび寺務総長に就いたが間もなく辞めた。昭和六年(一九三一)十二月三十一日没。九十歳。法名は祐誓院釈舜台。主著『真宗安心論』『大経講話』『石川舜台選集』など。(柏原 祐泉)(下線は引用者による、以下同じ)

2) 北海道に於ける「大谷街道」はその顕著な例である。

3) 引用は“Japanknowledge”(http://japanknowledge.com/)に拠る。

また近年では、「金沢ふるさと偉人館」による企画展「巴里・倫敦に留学した加賀の学僧たち—松本白華・石川舜台・赤松連城—」(2012年9月22日—12月2日)が開催されたが、そこでは次のような文章で紹介されていた⁴⁾。

金沢市小立野にある永順寺(浄土真宗大谷派、後に川上新町に移転)住職石川祐誓の次男として生まれました。文久二年(一八六二)から京都の高倉学寮で学び、慶応元年(一八六四)金沢に戻ります。明治二年(一八六九)から人材養成のために「慎憲塾」を開きます。北方心泉はここで学んだ一人です。この年、松本白華とともに異宗教論となり、金沢に流されたキリシタン(五二五名)に転宗を論しました。

明治五年、教部省に出仕した大谷光瑩について東京へ出た舜台は、隠密裡に光瑩の洋行を計画、実行します。こうして九月、大谷光瑩、松本白華とともに欧羅巴に宗教事情視察にいきます。帰国後、寺務所改革、人材養成を行い、世界的真宗を目指し近代化に尽くしました。同九年寺務総長となりますが、同一一年金沢に戻り「慎憲塾」を再開、同二五年富山県石動の道林寺住職となります。同三〇年から再び寺務総長に就き、同三八年に辞めるまで三度寺務総長に就任しました。退任後、金沢市長町の道林寺子坊で隠居生活を送りました。

これらの紹介文を読むと、現在の舜台の評価基軸として教団改革があり、その一つの要因が海外への布教、世界進出といった国際性があることがそれぞれの下線部からわかる。この点については鹿野久恒編『傑僧石川舜台言行録』⁵⁾でも次のように述べられており、少なくとも今から五十年以上前には既に次のような評価になっていた事が伺える。

石川舜台の大政策即抱負は、一言にしていへば全世界を仏教化しやうとする汎仏教主義とも称すべきものであつた。明治七年、本山教育課長となり、高倉大学寮を貫練場と改称し尋いで育英、教師の二校の設置は全く師の立案に成つたものである。又私達の留学も総務と石川師との決心で之を断行せられたのであつた。(中略)石川師の理想は何処までも否、殆んど無制限に大きかつたのである。(第三編「舜台老師の面影」(三)石川舜台翁を語る 南條文雄)

こうした舜台の計画は、結局は舜台の宗派内での失脚によって頓挫するのであるが、一時期大谷派が海外布教に力を入れたのは事実である。では実際、大谷派はどのようにして海外布教、朝鮮への進出を行ってきたのであろうか。

4) 企画展で配布された小冊子による。

5) 仏教文化協会(1951.3)、p.243

3. 大谷派の朝鮮開教へ至るまでの足跡

福崎毅一編『京仁通覧』⁶⁾にある「大谷派本願寺朝鮮布教一覧」によれば、明治四十五年時点で韓国にある大谷派の拠点は五十四箇所、その内、釜山別院(明治十年十一月創立)、元山別院(明治十三年十月創立)、仁川別院(明治十七年四月創立)、京城別院(明治二十三年創立)、木浦別院(明治三十年五月創立)の五カ所が別院⁷⁾と呼ばれる寺院で、それ以降は全て明治三十八年以降に創立された出張所もしくは布教所という扱いになっている。この中でも特に最初に進出することになった釜山別院を中心に見ていきたい。

大谷派本願寺朝鮮開教監督部編『朝鮮開教五十年誌』⁸⁾(以下『五十年誌』)には、大谷派が朝鮮へ進出し、布教することになったきっかけを次のように記している。

従つて茲に住民の生活保護及經濟運用の機關設置と共に慰安機關として宗教が当然必要を生じて来たのである。

我本願寺はたとへ政教は分離すると雖も、宗教は即ち政治と相まち相補けて以て国運の進展発揚と国民の活動を企図すべきことを信条としてゐた。明治政府が維新の大業を完成し漸く支那、朝鮮等の諸外国に向つて発展をはかるに當つて、本願寺も亦北海道の開拓をはじめ支那、朝鮮の開教を計画したのである。即ち本願寺に海外布教局を設置し、石川舜台師を局長とし、渥美契縁、和田圓什師等がその衝に當り先づ明治九年上海に別院を設置し、小栗栖香頂師を派して支那の開教を開始した。

恰も明治十年時の内務卿大久保利通氏は、外務卿寺島宗則氏と共に本願寺管長巖如上人に書を呈して朝鮮開教のことを懇請し且つ依頼したのであつた。直ちに本願寺に於ては第一次開教に功勞ある浄信の裔奥村圓心及平野恵粹両師を抜擢して釜山に別院を建設すべきことを命じたのである。

こゝに注意すべきことは大久保内務卿等国家の要格の人々が朝鮮開教について独り我本願寺を指摘したことである。我本願寺はさきに浄信の釜山に高德寺を建設するあり、続いて徳川時代には朝鮮の使節が来朝する度に東京浅草本願寺を旅宿として滞在をした等、特殊の関係があつたのである。代々の浅草輪番は極めて公平な教家としての立場から彼等朝鮮の使節を保護し且

6) 中村三一郎(1912.6)、pp.126-127。引用は『編集復刻版 仏教植民地布教史資料集成(朝鮮編)』第1巻(中西直樹編、三人社、2013年6月)に拠る。

7) 本山の寺のほか、その出先機関として本山に準じて別のところに造られた寺院。(「日本国語大辞典」、引用は注3と同じ。

8) 大谷派本願寺朝鮮開教監督部編(1927.10)、pp.18-19。引用は『編集復刻版 仏教植民地布教史資料集成(朝鮮編)』第5巻(中西直樹編、三人社、2013年6月)に拠る。

つ便宜を与へたのであつた、故に朝鮮側に於ても不勲本願寺を徳としてゐたこと等の朝鮮との因縁がその開教にあたり、国家の要略をして本願寺を指摘するに至らしめたものであらう。

上記の引用文には二点注目すべき記述がある。まずは大久保利通、寺島宗則といった要人が東本願寺だけを開教に指名したことである。『五十年誌』はその理由を奥村圓心の祖先である奥村浄信が、織田信長がほぼ国内統一を果たした頃に高德寺を建設した経緯があつたことや、朝鮮通信使が浅草本願寺を旅宿として利用していたこととしている。高德寺は現在も「釜山高徳寺」と呼ばれ、奥村家と朝鮮半島に強いつながりがあつたことは確かである。しかし、これは『五十年誌』が「大谷派本願寺朝鮮開教監督部」という大谷派の公的機関によって編纂された書籍であることを考慮する必要がある。確かに奥村圓心が抜擢された理由は先述した通りではあるが、依頼の内容は当時の外務卿と内務卿が揃って一つの宗派にだけ行うようなものではない。そこにはもう少し密接な人間関係があつたと考えられる。その人間関係を形成していたのが、石川舜台であり大久保利通であつた。舜台は1.で見たように、大谷光瑩に従って欧米視察を行っていたが、大久保も丁度その頃、岩倉遣欧使節団の一員としてヨーロッパに滞在しており、両者はそこで知己になつたと考えられる。舜台と大久保の直接の関係が記されているわけではないが、舜台と行動を共にしていた成島柳北が書き記した『航西日乗』⁹⁾には

(明治五年十一月)十六日月晴 本日我が大使岩倉右府木戸大久保諸公英国ヨリ来タリ
 (明治六年一月)廿二日水曜雨 晨起 現如師ト再ビ大使ノ館ニ赴キ岩倉木戸大久保諸公ニ陪シリ
ユキセンビルグノ天文台ニ赴キ諸器械ヲ観ル
 (明治六年)四月八日火曜晴 午後「グランドホテル」ニ赴キ 大久保利通君ニ謁ス 君ハ明日此地ヲ
 発セラルハナリ(年月は引用者が便宜上記載した。)

と少なくとも三回大久保利通の名が登場しており、それなりに舜台たち大谷派一行と、使節団の一行との関係はあつたと考えるのが妥当であらう。こうした人間関係の延長線上に、舜台が明治九年に海外布教局局長となつていたことも加わり、両者の利害が一致した結果、大谷派にまず朝鮮布教の機会が与えられたのではないだろうか。

9) 「花月新誌」(118号(明治14年11月30日)~142号(明治16年8月1日)まで毎号連載、最終回のみ153号(明治17年8月8日)に掲載)、引用は「海外見聞集」(「日本古典文学大系 明治編」5松田清・ロバートキャンベル・堀川貴司・杉下元明・日原傳・鈴木健一・堀口育男・「航西日記」を読む会・齋藤希史校注、岩波書店、2009年6月)に拠る。

もう一つは奥村圓心が釜山別院での布教を命じられたことである。奥村圓心の釜山での活動、さらには大谷派の釜山布教の意味そのものについての先行研究は非常に多い。例えば金潤煥「開港期釜山における東本願寺別院と地域社会」で金は次のように纏めている¹⁰⁾。

近代日本仏教における中国や朝鮮、台湾などの東アジアの諸地域への進出についても、この二つの視点からの研究が可能であろう。日本仏教の朝鮮進出に関する先行研究は、主に明治政府と協力して行った宗教的な侵略であると分析している。そして、真宗大谷派を中心に日本仏教の全般的な海外布教活動の実態や制度に関する研究 [小島・木場編 1992]や真宗大谷派朝鮮布教の基礎的な研究 [木場 1992]などがあげられる。また、李東仁という朝鮮開化僧侶を中心に、釜山東本願寺別院と朝鮮開化派の關係に着目した研究 [韓哲曦 1988、최인택 2000]や、真宗大谷派の朝鮮における社会事業を中心とした研究 [諸点淑 2006]がある。

本稿の趣旨と外れる為、これ以上の事を改めて言及する事はしない。ただ大谷派に於ける高德寺の寺格を考えると、大久保利通、寺島宗則の要請に応えるにはその位相は多少低い為、そこには引用文中にあるように、圓心の祖先である浄信が天正年間に高德寺という寺院を建設したということが多分に影響したと考えられる。

圓心はこのような政治的判断の上で抜擢されたわけだが、その期待に報いるため圓心は大いに働いた。同じく『五十年誌』からの引用になるが、

十年十月最初の修繕を了へて十一月八日第一回の法筵を開始してから、毎月日を定めて四回乃至五回の定例を開いた。一方奥村師はじめ当時の在勤諸氏は、単に読経法話に過すのみならず常に在留民の師父として、その日常茶飯事に対しても教家としての範を示すことを忘れなかつた程緊張を示してゐたといふ、十二月七日には現在釜山婦人会の母体である女人講が組織され婦女子の為に種々の施設が講じられてゐる、十二年一月七日は入仏供養の大法会が行はれ、釜山の在留者は云ふ迄もなく、京城にあつた花房公使までが参拝し、釜山開闢以来の盛況を呈した。ともかく唯一の寺院として一般の歓迎をうけ、且つ異郷にある同胞の心をいかにばかり慰めたことであらうことは想像するに余りあるではないか。

然しながら、開教の目的は在留邦人に向つて教法を説く以外更に重大なる使命をもつてゐる、即ち朝鮮同胞に対する布教である、従つて奥村師は彼等との接触には多大の苦心を払つてゐるが一方朝鮮の僧侶も亦日本仏教の刺戟を求めて日を経るに従つて別院を訪問する者多く盛んな時には一日に五十余名の多きにのぼつたと伝えられてゐる¹¹⁾。

10) 神戸大学(2011.3)『海港都市研究』第6号、pp.43-57

11) pp.26-27、引用は注8に同じ。

傍線部について少し補足説明しておく、「女人講」とは「講」と呼ばれる「地域社会をおもな母体として、信仰、経済、職業上の目的を達成するために結ばれた集団」¹²⁾の中でも女性(ここでは浄土真宗を信仰する女性たち)によって構成されたものを表している。そしてこうした「女人講」のような婦人団体が欧米の婦人運動と重なり合う形で、明治二十年代から徐々に日本国内に誕生してくることになる。釜山婦人会は日清戦争が始まる直前の明治二十六年に設立され、日清・日露戦争の遺族への弔問金送付や北清事変での慈善活動などを行い、そこに明治三十八年、奥村五百子が講演のため来釜、五百子の趣旨に賛同し釜山婦人会は「愛国婦人会」に改称、翌明治三十九年には「愛国婦人会韓国委員会本部」の所属に移行する事になった。

「愛国婦人会」は先ほど名前の挙がった奥村五百子によって提唱された組織である。飯田祐子「婆の力—奥村五百子と愛国婦人会—」¹³⁾での説明が簡潔にまとまっているので引用すると、

一九〇一(明治三四)年という日清日露の戦間期に作られた愛国婦人会は、一九四二(昭和一七)年に大日本連合婦人会(一九三〇年成立)・国防婦人会(一九三二年成立)とともに大日本婦人会に統合再編されるまで存在し続けた。その意味で、婦人による軍事援護団体の魁ともいえるだろう。明治二〇年代から生まれつつあった婦人団体の流れに位置しながらも、愛国婦人会はその規模の大きさにおいても社会的認知の度合いにおいても、他と一線を画して最も強力な団体となった。一九〇八年には、会員数七〇万を越している。

その提唱者は奥村五百子という老婆である。日露戦争を経て国家的規模にふくれあがった愛国婦人会は、実は、この一人の老婆の並々な情熱によって生み出されている。もちろん正確に言えば、彼女の情熱は、近衛篤磨をはじめとする時の権力を把持した男たちによって、また内務省や陸軍省によって、明治中期の女性の国民化と再配置にとって有益だと判断されたのであって、もしその指示と援助を得られなかったら愛国婦人会は存在しなかっただろう。「愛国婦人会」という名称そのものが、近衛の発案によるものである。

とあるように「婦人による軍事援護団体の魁」であった。「軍事援護」の内容としてはもう一度飯田論文から引用すれば、

「一口に軍人援護といつても、赤十字は、戦場で傷いた軍人に手当を加へる衛生機関を支へる団体だし、愛国婦人会は、戦死者の遺族や傷痕軍人の生活を助ける団体だから、性質がちがふ。」

12) 小学館「日本大百科全書」「講」の項目。引用元は注3に同じ。

13) 飯田祐子「婆の力—奥村五百子と愛国婦人会—」(小森陽一・成田龍一編著(2004.2)『日露戦争スタディーズ』紀伊國屋書店)所収。

愛国婦人会は、戦死者遺族救護を目的に掲げて創立されているように、直接戦地と接触性を持つものではない。ある種の迂回があるのである。上野千鶴子は、女性の国民化を、兵役への「参加型」とそれからの「分離型」の二種に分けたが、愛国婦人会が果たした役割はあきらかに後者にあたり、そのための回路をつくりだしたことにある。(中略)家庭における良妻賢母でありながら可能な援助のメタファーが、愛国婦人会の方向性を明確にかたちづかった。ということになる¹⁴⁾。

なお、『五十年誌』が釜山開教について述べる時に、婦人会のことに触れた意図であるが、これは釜山開教に尽力した〈奥村〉圓心と愛国婦人会設立に尽力した〈奥村〉五百子、両者の姓を見ると気づく事だが、彼等は兄妹であった。その事を多少なりとも関連づけて記載しておきたかったのではないだろうか。先にも引用した『傑僧石川舜台言行録』には五百子と大谷派の関係を次のように記している¹⁵⁾。

明治三十二年支那山東省に蜂起した義和団匪の乱は、一時その勢猖獗を極め、翌年五月には北京に侵入して列国公使館を襲ひ、事変は愈よ拡大するに及び遂に連合軍隊の出動をみるに至つた。この時本山では事務総長たる老師(引用者注一石川舜台のこと)の提議によつて、大谷瑩信連枝を正使に南條文雄博士を副使として現地へ慰問のため派遣したが、
この一行の中にたゞ一人の女性奥村五百子刀自が加わつていたことも、特に翁の配慮によるものであつた。

(中略)

この惨鼻な光景は一行をして覚え目目を掩はしめたが、刀自は深く心に感ずるところがあつたらしく、帰途朝鮮の釜山別院で満堂の在留邦人に対し、我が軍人の絶大な困苦と、清国婦女子のいうに忍びぬ悲境に沈淪しつゝある実況を詳かに伝えるとともに、この際吾ら日本婦人の手によつて、国家のため人道のため、一大救済事業を起すことの必要なるを滔々数時間にわたつて力説し、多大の感動を与えたのである。これ刀自が後年愛国婦人会を創立して縦横活躍せる動機であり、その第一声でもあつたのである。(第二編「逸話」二三、老師と奥村五百子)

こうした関係からも奥村五百子は奥村圓心の単なる妹でなく、大谷派も単に国家に命じられて朝鮮開教を行ってきたわけではない事がわかる。大谷派も愛国婦人会も国家の思惑に乗りながら、自らの勢力を広げてきたのであり、またそもそもこの「愛国婦人会」の成立過程が、大谷派が朝鮮布教を命じられたのとほぼ相似形である事からも、奥村圓心と奥村五

14) 注13に同じ。

15) pp.139-140 引用は注5に同じ。

百子、この兄妹たちがもたらしたものをもう一度見直す必要があると考える。

話を戻すと、この『五十年誌』の奥村圓心についても記述で特に重要なのが次の箇所である¹⁶⁾。

釜山別院が開設された翌年、明治十一年十二月の一日、肌を裂くやうな寒い朝であつた。通慶寺の僧と称する李東仁氏が、慇懃に奥村師の提撕をうけたいとて別院を訪ねて来た。品格もあり文筆も勝れこれまで奥村師が会つた僧侶とは非常に趣が異つてゐたので、奥村師も氏を待つこと甚だ鄭重であつた。

李東仁は言うまでもなく、金玉均らと並んで開化派の中心人物の一人であり、高宗の信頼も厚かつたが、それが徒となつて暗殺されてしまった人物である。李東仁が日本に渡り、当初の活動の拠点として使われたのが浅草本願寺をはじめとする大谷派の寺院であるが、その橋渡しをしたのが奥村圓心であつた。舜台が圓心を指名したことが李東仁の運命を動かしたとも言える。

東本願寺の朝鮮開教については、これまで石川舜台の関係は全く注目されてこなかったが、実際は舜台の人間関係や宗派内の権力によって行われてきたのである。これらはほんの一例であるが、大谷派の近代化を考察する上で石川舜台の言動が極めて重要である事が理解できたと考える。

4. おわりに

もう一度『傑僧石川舜台言行録』¹⁷⁾から引用を行うと、

どうして石川老師がかういふ具合に現如上人の新門様時代、彰如上人の新門様時代から御奉公なされたかといふと、これはやはり石川老師がいつも革新的であつて保守家でない、革新家であつたからである。(中略)今も話してをつたのですが、渥美翁と井上候と、石川翁と大隈候と、何かそこに一つの関連があるやうに思ひます。ともかくも明治から今日迄の本願寺にとつては、石川翁、渥美翁のこの二人は仇のやうに人は思つたけれども、両方あつて今日の本願寺

16) p.137 引用は注8に同じ。

17) pp.212-213、pp.270-271 引用は注5に同じ。

が榮えてきたのであります。(第三編「舜台老師の面影」(二)明治仏教の先駆者 明烏敏)

然し又一面から考へてみると舜台は借金を作る様な性格に生れついて居たとも言へるやうである。舜台の行跡を通観すると前記の如く舜台は常に遠大な宗教的理想によつて行動してゐたのだつて、各種の営利事業はその宗教的大理想実現の手段として行つたまで利益を最後の目標として行つたのでない。(中略)舜台をよく知つてゐる人は舜台は決して私利を計つたり私腹を肥したりする人間でなかつた事を口を揃へて証明してゐる。蓋しこの点は舜台の人格を考へる場合尤も大切な点であり、而して金銭に対し余りにも淡泊であつた事が営利事業に成功し得なかつた一つの重大な理由でもあつたらうと思ふ。(第三編「舜台老師の面影」(六)舜台の面影 多屋頼俊)

暁烏敏や多屋頼俊といった大谷派内部の人間からもこのように評され、またもう少し時代が下つても、

石川舜台の施策は、すべてにおいて大掛りであり、またあまりにも理想が高すぎた。これを人々が批評して、石川の大風呂敷というのはまだよいとして、石川は大山師と酷評する者さえあつた。筆者は石川の業績をあたう限りにおいて、冷静に観察すると、確かに普通人からみれば大風呂敷に違いない。しかし彼の性格には稚氣愛すべきものがある。一点の私心も認められない。もちろん凡夫のことであるから、判断の誤りもあろう。反対者に対する憎しみもあろう。事を成就させるためには、ある程度の策略も必要であらう。自分の子分がかわいくて、値打ち以上にこれを重用したこともあろう。これらはすべて高大なる目的の達成に突進する場合には、ある程度許されるべきであらう。この意味において石川舜台がことさらに悪質の人物であつたとは思われぬ。(中略)要するに石川舜台は、あらん限りの智慧をしぼって、宗門のために尽くしたということは認めてもよからう。(常光浩然『明治の仏教者』上¹⁸⁾)

と、上記のように、石川舜台の言動は再評価される形で一度総括されている。現在はこうした再評価後の視点で論じられることがほとんどである。しかし本当にこの評価が適切なのかは、今一度検討する必要がある。と言うのは、2.で幾つかの事典から引用したように、石川舜台は、大谷派の新法主と共に海外渡航し、帰国後すぐに改革を行うというように、欧米での経験を基に改革を目指した理想主義者に見える。しかし結果としては渥美契縁と権力闘争を繰り返し、両者が権力を奪う度に大谷派の方向性は揺れ動き、結果として

18) pp.172-173 春秋社、1968年9月。

大谷派の改革はほとんど進まなかった。しかしそれが1951年には、明烏敏という戦中戦後を通しての大谷派内での実力者や、多屋頼俊という大谷派の大学である大谷大学の教員によって、つまり宗教的にも学問的にも、石川舜台の言動をある種のフィルターを通じた状態、つまり舜台の言動は当時は理解されなかったが実は宗門を思っただけの事であったという視点で見ることになった。そのフィルターを出来る限り外す事が、明治期の大谷派の活動、さらには宗教と近代日本の関係を窺うためには必須であり、今後の課題と言える。

【参考文献】

- 小川原正道(2010)『近代日本の戦争と宗教』講談社、pp.14-38
_____ (2014)『日本の戦争と宗教1899-1945』講談社、pp.12-46
小熊英二(1998)『〈日本人〉の境界 沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮植民地支配から復帰運動まで』新曜、pp.147-167
小森陽一・成田龍一編著(2004)『日露戦争スタディーズ』紀伊國屋書店
酒井哲哉編(2006)『岩波講座「帝国」日本の学知』第1巻、岩波書店、pp.11-42
中西直樹(2013)『植民地朝鮮と日本仏教』三人社、pp.17-66
中西直樹編(2013)『編集復刻版 仏教植民地布教史資料集成〈朝鮮編〉』第1巻、三人社
_____ (2013)『編集復刻版 仏教植民地布教史資料集成〈朝鮮編〉』第5巻、三人社

・原文の圏点・ルビ等は省略した。

논문투고일 : 2016년 08월 03일
심사개시일 : 2016년 08월 03일
1차 수정일 : 2016년 08월 11일
2차 수정일 : 2016년 08월 11일
게재확정일 : 2016년 08월 15일

 <要旨>

石川舜台の影響力について

- 大谷派の朝鮮開教のあり方を一視座として -

天野勝重

浄土真宗の宗派である東西両本願寺は日本仏教の中でも有数の巨大宗派である。両者は1600年代初めに江戸幕府の政策により二つに分けられ、現在までその形を維持している。

両派が特に違った対応を見せたのが幕末である。東本願寺(大谷派)は当初幕府方に付いた。結果としては幕府が倒れ、薩長を中心とした明治新政府が成立し、大谷派の立場は悪くなる。そのため大谷派は政府の要求を受け入れる必要が生じる。そして要求の一つが海外への布教であった。それらに大きな役割を果たしたのが石川舜台である。海外布教を始めとする大谷派の活動に、彼がどれくらい影響力を持っていたかを確認したい。

『朝鮮開教五十年誌』には、大谷派が朝鮮へ進出し、布教することになったきっかけが記されている。そこでは大久保利通などの当時の重要人物が大谷派だけを朝鮮開教に指名したことが述べられているが、その理由として、石川舜台の人間関係があったと考えられる。またこのほかにも釜山開教に大きな役割を果たした奥村圓心の任命などにも舜台は関わっている。

石川舜台の言動は再評価される形で一度総括されており、現在ではその視点で論じられることが前提となっているが、この評価が適切なのかは今一度検討する必要があると論者は考える。

About the influence of *Ishikawa Shuntai*

Amano, Katsushige

The sect in which East and West Honganji of Jodo Shinshu is the leading huge sect among the Japanese Buddhism. Both were divided into two by the Edo Shogunate of the policy in the early 1600s, it has maintained its form until now.

End of the Edo period was the correspondence that was particularly different. Nishi Honganji (Honganji faction) attached to overthrow the shogunate forces and Higashi Honganji (Otani faction) was attached to the original shogunate. As a result, the new government was established and position of Otani faction had become worse. Therefore Otani faction was necessary to accept one after another the request of the government. And one of the requests was a missionary overseas. *Ishikawa Shuntai* played a major role in the overseas missionary. Through the activities of the Otani school, including overseas missionary work, I want to analyze how he had influence.

For example there is a "Korea missionary work fifty years Magazine". It has been written that Otani faction to advance to Korea. There is an important description. It was appointed only Otani sect in Korea missionary work to *Okubo Toshimichi*. The reason is considered that was a relationship of *Ishikawa Shuntai*. And he was also involved the appointment of *Okamura Enshin* who played a major role in Busan missionary work.

Ishikawa Shuntai is summarized once in a form to be re-evaluated. But it is necessary to be discussed at that point of view whether this evaluation is the appropriate.